

幼年時代の記憶と集合的記憶(2)

Memory in Childhood and the Collective Memory(2)

神谷 英二

要旨 ヴァルター・ベンヤミンは、幼年時代にこだわり、幼年時代の記憶に特別な意味を与えている。本研究は、ベンヤミンの思索を手がかりに「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」を問う。本研究は3部構成であり、本稿はその第2部である。テキストとしては、『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』を主に扱う。ベンヤミンは、幼年時代の記憶と集合的記憶の交差を探究する際に「厳密な意味での経験」の重要性を指摘している。ベンヤミンは「経験」と「体験」を厳格に区別しており、本稿ではまずこの「経験」と「体験」の違いを明らかにした。次に、プルーストの「無意志的記憶」と同義とされるベンヤミンの「記憶」が、「厳密な意味での経験」といかに関わっているかを解明した。その際、「照応」と「アウラ」を鍵概念として考察し、「記憶」が偶然的で一時的であることと、「厳密な意味での経験」が礼拝的性格をもつことを明らかにした。

キーワード ベンヤミン 幼年時代 記憶 集合的記憶 経験 アウラ

1 はじめに

「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」(神谷2011)における、本研究のこれまでの考察を踏まえて、「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」という問いについて、ヴァルター・ベンヤミンの思索を手がかりにさらに考察を深めるためには、『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』のなかで、「経験」について問いつつ述べられている以下の洞察が思い出されるべきである。

「厳密な意味での経験が存在しているところでは、個人的な過去のある種の内容が集合的な過去の内容と記憶のなかで結合する。」(GS I, 611)

この洞察について探究することにより、幼年時代の記憶と集合的記憶のつながりをより鮮明に描きだすこと、これが本研究における次の課題であった。

2 「経験」と「体験」

(a) 「経験」

先に挙げた引用に見られる「厳密な意味での経験」とは一体何か。これがまず問われなければならぬ。

ベンヤミンは『経験と貧困』という文章を1933年に発表している。彼はこの時期、『物語作者』をはじめとして、「経験の貧困化」をテーマに何編かの文章を残している。そこでは、経験の貧困化過程としてのヨーロッパ近代に対する批判が展開されており、詩や物語という古い形式に保存されている「経験の伝達可能性の救出」について論じられている。そして、それと同時に、経験が貧困化した状況を新たな創造の零点の可能性とする視点も提出されている。(浅井 1996, 654)

『経験と貧困』もこの一連の著作のひとつである。ベンヤミンは「技術のこの途方もない発展とともに、ある全く新しい貧困が人間に襲いかかってきた」(GS II, 214) と主張する。それは「経験の貧困」(GS II, 215) である。「経験の相場はすっかり下落してしまった。しかもそれは、1914年から18年にかけて、世界史のなかでも最も恐ろしい出来事のひとつを経験することになった世代において起こっている。」(GS II, 214) これがベンヤミンの見立てである。「世界史のなかでも最も恐ろしい出来事のひとつ」とは、もちろん第1次世界大戦のことにほかならない。

この経験の貧困が、ある世代に限定された特殊なものであるならば、80年近く経った現在、哲学の問題としてベンヤミンの嘆きに耳を傾ける必要はない。ところが、「この経験の貧困は単に私的な経験の貧困であるばかりでなく、人

類の経験そのものの貧困にほかならないのだ。」(GS II, 215) したがって、わたくしたちは誰もがこの貧困から逃れることは困難であり、哲学者はこれを問いの対象とせざるを得ないのである。

しかし、ベンヤミンは希望と救済の可能性を捨てることはない。この経験の貧困は、「一種の新たな未開の状態」(*ibid.*) でもある。彼は、「未開の状態についての新しい、ポジティブな概念を導入するため」(*ibid.*) にこの言葉を使うと主張する。偉大な創造者はこうした状態から出発する。これまでもデカルトのように、偉大な創造者たちのなかに何はともあれまず一切を清算してしまうところから始める者がいたのであり、これからもそうした創造者は登場するというのである。それゆえ、この状態は新たな「創造的零点」(GS II, 451) でもあり得るのだ。

もちろんベンヤミンは単に楽観しているのではない。「私たちは貧困になってしまった。人類の遺産をひとつまたひとつ、次々犠牲にして手放し、真価の百分の一の値で質に入れ、その代償として差し出された〈アクチュアルなもの〉という小銭を、やっとの思いで手にしなければならなかった。」(GS II, 219) 経験の貧困化によってなくしたものの大きさは否定のしようがないのである。

そして、ベンヤミンは、こうした洞察を基底に据えた上で、『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』のなかでは、「経験」(*Erfahrung*) と「体験」(*Erlebnis*) を厳密に使い分けている。

19世紀の末以来、哲学においては、「(真の)経験」(GS I, 608) を獲得しようとする一連の試みがなされたとベンヤミンは指摘する。こ

の一連の試みというのは、特定の学派を指すものではない。生の哲学を主要なものと考えていることは確かだが、ユングの重要性も言及されており、狭義の生の哲学にとどまるものではない。

そして、こうした哲学的試みにおいては、〈真の〉経験は、文明化された大衆の画一的で不自然に変質した生活（Dasein）に沈殿する経験と対立する概念として考察されているとされる。そして、ベルクソンの『物質と記憶』こそが、この一連の営みのなかに聳える記念碑的業績と考えられている。

経験とは、「想起（Erinnerung）^{*1}において厳格に固定される個々の事実（Gegebenheiten）よりも、堆積されて記憶（Gedächtnis）のなかで合流する、意識されないことの多いデータによって形成される」（*ibid.*）ものである。そして、それは、「集団的な生においても個人的な生においても、伝統に関わる事柄」（*ibid.*）なのである。

そして、ベンヤミンにおいては、経験と物語は不即不離のものとして考えられている。物語は伝達の最古の形式のひとつであり、情報とは異なり、物語は「純粹に出来事自体を伝えることをめざしてはいない」のであり、物語は「出来事を報告者の生のなかに沈める。」それは、その出来事が「経験として聞き手に与えられるようにするため」なのである（GS I, 611）。

すなわち、柿木も指摘するように（柿木 2006, 39）、経験が貧困化し衰退する前にあっては、何かを経験するとは、自己が出会った出来事について聞き手である他者の経験となるように他者に語りうることであったのである。

実は、ベンヤミンの著作のなかには「厳密な意味での経験」に対する辞書的な定義といえる

ような記述は見当たらない。『来たるべき哲学のプログラム』のなかで「未来の哲学のプログラムの命題」（GS II, 163）として示されているように、そもそも彼の思想的営為全体が、形而上学を可能にするような仕方でも、宗教的経験をも包括する「経験の新しい概念」（*ibid.*）を模索する営みであったのだ。

(b) 「体験」

それでは、これに対して、「体験」とはいかなるものだろうか。ベンヤミンはヴァレリーの思索とフロイトの理論を手がかりにしながら考察を繰り広げている。そこでは、刺激防御とショック体験から分析が始まる。

ヴァレリーは言う。「人間の印象ないし感覚的知覚は、それ自体としてみれば、……不意打ちのジャンルに属する。それは人間のある種の能力不足を証明している。……想起^{*2}は……ひとつの根元的現象であって、その目的は、はじめはわれわれに欠けている（刺激受容の）組織化のための時間をわれわれに与えることにある。」（Valéry 1935, 264-265）

さらに、フロイトの『快感原則の彼岸』における理論を踏まえ、体験に関する考察が展開される。ショックの受容は、「刺激克服のトレーニングによって容易になる。」（GS I, 614）刺激克服のためには、夢も想起も動員されることがあるが、「通例このトレーニングは、フロイトが推測しているように、大脳皮質に位置する目覚めた意識の役割である。」（*ibid.*）そして、ショックがそのように捉えられ、そのようにして意識によって受容されると、「そのショックを引き起こした出来事は、正確な意味での体験の性格を与えられる」（*ibid.*）のである。そして、個々の印象に占めるショック要素の割合が大き

くなればなるほど、そして刺激防御のために意識が不断に動員されざるを得なくなればなるほど、さらに意識の活動が成功を収めれば収めるほど、「印象が経験のなかに入ることは少なくなり、印象が体験の概念を満たす可能性は大きくなる。」(GS I, 615)

これがベンヤミンによる「体験」の定義である。こうした体験のあり方をベンヤミンはいくつかの具体的な場面に焦点を絞って分析してみせる。それは、「都市の群衆のなかでの通行人」、「単純労働者」、「賭博」である。

ベンヤミンも言うように、ポーが『群衆の人』で描く通行人たちは、あたかも自動機械に順応させられて、もはや自動的にしか自分を表現できなくなった人間のような行動をとっている。「彼らの振る舞いは、ショックに対する反応なのである。」(GS I, 632) 群衆のなかでの、こうした通行人のショック体験に対応するのが、機械を相手にする労働者の体験である。また、賭博も同様の体験として挙げられている。ボードレールにおいては、残された作品を見る限り、工場労働者や未熟練労働者の体験に関する理解は欠けていたであろう。しかしながら、ベンヤミンも指摘するように、賭博は「機械が労働者の身に作動させる反射的なメカニズムをまるでそれが鏡に映っているかのように有閑者(Müßiggänger)において一層詳しく研究できる過程」(GS I, 632)であり、ボードレールはこれに魅せられていた。賭博にのめり込んでいる者は、もはや反射的にしか行動できない。彼らは「自動装置としての生活(Dasein)」(GS I, 634)を送っているのである。

そして、彼らは、ベルクソンが描いた「記憶を完全に抹消してしまった人物たち」(*ibid.*)に似ていると指摘されている。これは何を意味

するのであろうか。ここで、体験と時間の関係が考察される必要がある。単純労働や賭博の本質を規定している概念は、「〈つねにはじめからやり直すこと〉」(GS I, 636)である。そこには、本質的には伝統も経験や技能の蓄積もない。しかしながらももちろん、こうした行為が時間と無関係であるはずはない。体験を本質的な構成要素とする行為をする人々は、いわば「地獄の時」のなかにいる、「着手したものを完成することを許されない人々」であり、「自分の経験を騙しとられた男」(*ibid.*)なのである。彼らのパートナーは、「秒」であり、時計の「秒針」である(*ibid.*)。この秒は蓄積されて、やがて伝統や歴史となるというものではない。ブルーストが指摘する「時の奇妙な分割」(GS I, 637) (Proust 1921, 652) がここにはある。

(c) 偽装された経験

これまで見てきたように、ベンヤミンは「経験」と「体験」を厳密に区別し、新しい経験の概念を模索している。しかし、わたくしたちはいわば「偽装された経験」に出会うことがあり、「経験」と「体験」の峻別は必ずしも容易なことではないことがわかる。

「偽装された経験」の一例として、ベルクソンの経験概念が挙げられている。周知のように、ベルクソンは『物質と記憶』では、経験の本質を持続によって定義している。この経験の本質を持続と見なすことによって、死と歴史と伝統が排除されるとベンヤミンは批判する。

それではこの批判を具体的に見てみよう。ホルクハイマーによる「形而上学者ベルクソンは死を隠蔽する」という批判を踏まえ、「ベルクソンの持続は、死を欠落させていることによって、歴史の範疇から(そして先史の範疇からも)

遮断されている」とベンヤミンは厳しく批判する。「死を拭い去られた持続は、装飾の悪しき無限性をもっている。このような持続は、そのなかに伝統を持ち込むことを許さない。それは経験という借り物の衣裳を着て得意げに闊歩する体験の権化である。」(GS I, 643)

ここで若干ベルクソンを擁護すれば、そもそもベルクソンが「記憶」と呼ぶ作用は、通常の意味での「記憶」とは大きく異なる。通常の意味での「記憶」とは、そのままでは流れ去り消え去るような過去を現在へつなぎとめることである。しかし、ベルクソンは全く異なる意味で理解している。(cf. 杉山 2006, 98)

『物質と記憶』では、「記憶とは、現在から過去への遡行なのではなく、過去から現在への進行なのである」(Bergson 1985, 169/ Bergson 1959, 369)と言われている。また、『創造的進化』では、「我々の意識的存在の基底そのものは記憶であり、現在への過去の延長であって、つまりは不可逆で働きつつある持続なのである」(Bergson 1986, 16/ Bergson 1959, 5080)と主張されている。こうしたベルクソン独自の記憶概念により、記憶がつねにすでに現在において機能しているという時間論が成立しており、死と歴史と伝統が隠されてしまい、現われづらいものとなっているのである。

3 「経験」と「無意志的記憶」

ベンヤミンの理解によれば、ベルクソンが提示する経験の主体となるものは文学者(Dichter)だけであろうと考えざるを得ないとされている。そして、プルーストこそがベルクソンの経験の理論を実地に検証した者として取り上げられるのである。先に述べたように、ベ

ンヤミンはベルクソンの経験概念をいわば「偽装された経験」と見なして批判するが、その一方でベンヤミンは、ベルクソンの『物質と記憶』では、記憶の構造が経験の哲学的構造にとって決定的に重要なものとされていることを評価している (cf. GS I, 608)。

「厳密な意味での経験」を構成する記憶*³というものは、知性の働きのみによって把握できるものではなく、誰もが必ず出会えるものではない。この洞察をベンヤミンはプルーストと共有し、ベンヤミンはプルーストの助けを借りて説明する。

それでは、この点を理解するために、ベンヤミンとともに「スワン家のほうへ」の記述を見てみよう。

「まるでコンプレーとは狭い階段でつながれたふたつの階だけで出来ていて、そこには夜の7時しか存在しなかったかのようなのである。かりに問いただす人がいたら、私とて、コンプレーには実は他のものも含まれていたし、他の時間も存在したと答えたであろう。だが、そんなふうに思い出したとしても、それは意志的記憶、知性の記憶によって提供されたもので、それが過去について教えてくれるなかに過去はなんら保存されていないので、私としても他のコンプレーをけっして想うかべようとしなかっただろう。」(Proust 1919, 68/ Proust 1987, 43)*⁴

ここでプルーストが書いている「過去」とは、かつて私が経験した「厳密な意味での経験」のことである。

「そうしたものはすべて、私には死に絶えていたのである。永久に死に絶えたのか？ そうなっていたかもしれない。それは多分に偶然に左右される。しかもわれわれの死という第二の偶然が、たいていの場合、第一の偶然の恩恵を

長い間待たせてはくれない。」(*ibid.*)そして、「われわれの過去も、それと同じである。われわれが過去を想いかべようとしても無駄で、知性はいくら努力しても無力なのだ。過去は、知性の領域や、その力のおよぶ範囲の埒外にあり、われわれには想いも寄らない物質的対象(その物質的対象がわれわれにもたらず感覚)のなかに隠れている。この対象にわれわれが死ぬ前に出会えるか出会えないかは、もっぱら偶然に左右される。」(Proust 1919, 69/ Proust 1987, 44)

プルーストの考える意志的記憶が過ぎ去ったものについて与える情報のなかには、経験の内実である、過ぎ去ったものそのものは少しも含まれていない(GS I, 608)。すなわち、いかに知性を働かせ、能動的に思い出そうとしても、真の経験の内実は死に絶えているかのように取り戻されることはない。そして、無意志的記憶による過去との出会いは、偶然的で一時的なものなのである。

さらに、マドレーヌと水中花の逸話にも見られるように、無意志的記憶により回復される出来事は、過去の或るエピソード全体を一気に顕現させることができるような無際限性をもってするのである。この点に関して、ベンヤミンが1929年に発表した『プルーストのイメージについて』のなかには、次のように書かれている。

「体験された出来事は有限であり、少なくとも体験というひとつの領域に包み込まれているのに対して、想起される出来事は、その前後に起こった一切の事柄に対する鍵にほかならないがゆえに、限界をもたないのだ。」(GS II, 312)

本稿の註1でも指摘したように、ベンヤミンは、『ボードレーンにおけるいくつかのモ

ティーフについて』においては、「想起」をプルーストの「意志的記憶」とほぼ同義のものとして使っている。しかしながら、この作品では、事情は異なり、この引用に書かれている「想起」は、文脈から判断して、プルーストの「無意志的記憶」に該当するものである。

4 「照応」

ベンヤミンの「記憶」とプルーストの「無意志的記憶」をより厳密に理解しようとするれば、「照応」(Korrespondenz)*⁵が重要な概念として浮かび上がる。

まず、「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」において、子どもの特権性を論じる際に引用した『パサージュ論』の断章を再度吟味しよう。

「近代的な技術の世界と、神話のアルカイックな象徴の世界の間には照応関係の戯れがある、ということを否定できる者がいるとすれば、それは、考えることなくぼんやりものを見ている者ぐらいだ。技術的に新しいものは、もちろんはじめはもっぱら新しいものとして現われてくる。しかし、すぐそれに引き続いてなされる子どものような想起のなかで、新しいものはその様相をたちまちにして変えてしまう。どんな幼年時代も、人類にとって何か偉大なもの、かけがえのないものを与えてくれる。どんな幼年時代も、技術的なさまざまな現象に興味を抱くなかで、あらゆる種類の発明や機械装置、つまり技術的な革新の成果に向けられた好奇心を、もろもろの古い象徴の世界と結びつけるものだ。」[N2a, 1]

「近代的な技術の世界」と「神話のアルカイックな象徴の世界」の間に照応関係があるということは、幼年時代において近代的な技術革新の

成果を古い象徴の世界に結びつけることが出来るということの意味している。

また、ボードレールの作品にしばしば現われる特異な日々に関わって、「照応」について、ベンヤミンは次のように指摘する。

「この目立つ日々というのは、ジュベールの言葉で言えば、完成する時の日々である。それは追想 (Eingedenken) の日々である。」(GS I, 637)

モラリストであるジョセフ・ジュベールは、彼の『随想録』のなかで、「時は永遠のなかにも見出される。しかしそれは地上の、世俗の時ではない。……その時は破壊しない。完成するだけだ」(GS I, 635) と述べている。したがって、この「目立つ日々」とは「永遠のなかの時」なのである。なお、この引用中にある「追想」とは「記憶の働き」、「無意志的記憶の働き」のことである。

そして、「そこにはいかなる体験のしるしもない。この日々は、その他の日々と結びついてはいない。むしろ時から突出している。それらの日々の内容をなすものを、ボードレールは照応という概念に定着した。」(GS I, 637-638) 体験が全く含まれていない、真の経験のみで満たされた日々の内容、これがボードレールの「照応」概念に関する、ベンヤミンの解釈である。そして、照応自体もまた経験なのである。「ボードレールが照応ということで考えていたのは、危機に対して確固たるものであろうとする、ひとつの経験であったと言ってよい」(GS I, 638) とベンヤミンは考えている。

しかしながら、ベンヤミンはボードレールの「照応」をすべて自分のものとして鵜呑みにすることはしない。経験の復元をめざすプルーストの意志は、あくまでも地上の生の枠内にと

どまっているのに対し、ボードレールの意志は地上の生を抜け出てゆく。そのために、ボードレールの世界では、照応も地上の生と歴史を超越してゆく。照応は、「追想の特定の日付の日々 (Data) である。それは歴史的な日々ではなく、先史の日々である。」(GS I, 639) そして、「過ぎ去ったものが、もろもろの照応のなかで一緒につぶやいている。そして照応の規範となる経験自体が、前世の生のなかに位置しているのである。」(GS I, 640)

ベンヤミンはボードレールとは異なり、プルーストとともに地上の生にさしあたり踏みとどまる。しかし、「照応の規範となる経験」という考えは継承し、それと同時に照応を「礼拝」に結びつける。ボードレールが照応として考えていた経験は、「礼拝的なものの領域においてのみ存在しうる。」(GS I, 638) そして、本質的に重要なのは、照応が、礼拝的な要素を内包する経験概念を定着するという点なのである。

ベンヤミンによれば、儀式や祝祭を伴う礼拝は、個人的な過去のある種の内容と集合的な過去の内容を繰り返し新たに融合させるのである。もちろんこの礼拝は、狭義の宗教的な礼拝をモデルとしながらもそれだけを指すものではない。

以上の分析を踏まえると、「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」でも言及した、『パサーージュ論』のなかで集合的記憶を幼年時代と関連させて考察している次の断章には、実は照応の力が働いていることがわかる。

「街路はこの遊歩者を遙か遠くに消え去った時間へと連れて行く。遊歩者にとってはどんな街路も急な下り坂なのだ。この坂は彼を下へ下へと連れて行く。母たちのところというわけで

なくとも、ある過去へと連れて行く。この過去は、それが彼自身の個人的なそれでないだけに一層魅惑的なものとなりうるのだ。それにもかかわらず、この過去はつねにある幼年時代の時間のままである。それがしかしよりによって彼自身が生きた人生の幼年時代の時間であるのはどうしてであろうか。アスファルトの上を彼が歩くとその足音が驚くべき反響を引き起こす。タイルの上に降り注ぐガス灯の光は、この二重になった地面の上に、不可解な（両義的な）(zweideutig) 光を投げかけるのだ。[M1, 2]

ここから、幼年時代の記憶と集合的記憶が交差し、融合する場面には、照応があり、「照応の規範となる経験」があることがわかる。^{*6}

5 「経験」と「アウラ」

それでは、本稿の最後に、ベンヤミンの「記憶」とプレーストの「無意志的記憶」をさらに深く理解し、「厳密な意味での経験」の全体像を明らかにするために、「アウラ」(Aura)について考えることにしよう。

「無意志的記憶のなかに定住しつつ、ある直観の対象のまわりに集まろうとするさまざまな表象を、この対象のアウラと呼ぶとすれば、直観の対象にまわりつくこのアウラは、ある使用対象に習熟として沈着してゆく経験にまさに対応するものである。」(GS I, 644)

このアウラとは何か。ベンヤミンの思想にとってしばしば重要な役割を果たしているアウラとは何か。ここではアウラ概念がベンヤミンの著作において初めて定義された『写真小史』で示されている定義を見てみよう。

「そもそもアウラとは何か。空間と時間の織りなす不可思議な織物である。すなわち、どれ

ほど近くにであれ、ある遠さが一回的に現われているものである。夏の真昼、静かに憩いながら、地平に連なる山なみを、あるいは眺めている者の上に影を投げかけている木の枝を、瞬間あるいは時間がそれらの現われ方に関わってくるまで、目で追うこと——これがこの山々のアウラを、この木の枝のアウラを呼吸することである。」(GS II, 378)

ここに記されている「ある遠さが一回的に現われているもの」とは、空間のなかに、ある瞬間に、時間的な遠さが現われることを意味しており、この一回性は、先に言及した無意志的記憶の偶然性の基盤となっている。

したがって、「個人的な過去のある種の内容が集合的な過去の内容と記憶のなかで結合する」という「厳密な意味での経験が存在しているところ」(GS I, 611) では、無意志的記憶によって思い出される経験の対象には、アウラが伴っているのである。つまり、無意志的記憶から浮かび上がってくる形象の特徴はアウラをもっていることなのである (GS I, 646)。

そもそもアウラは過去の形象にのみ伴うものではない。それでは、アウラはいかなる原理によって生じるのか。ここでの鍵は、「まなざし」(Blick) である。

「まなざしには、自分が見つめるものから見つめ返されたいという期待が内在する。この期待が満たされる時、まなざしには充実したアウラの経験が与えられる。」(*ibid.*)

この「期待」は、言葉の普通の意味でのまなざしにだけではなく、それと同様に、「思考の領域での注意深さという志向的まなざし」(*ibid.*) にも付随しうると考えられている。^{*7}

したがって、見つめられている者、あるいは見つめられていると思っている者は、まなざし

を開く (aufschlagen) ののである。それゆえ、「ある現象のアウラを経験するとは、この現象にまなざしを開く能力を付与すること」(GS I, 646-647) である。

このベンヤミンによる独特のまなざしに関する理論の基底には、ベンヤミン独自の認識論が存在する。ベンヤミンの思想のなかで、「認識」について考察する際には、『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』において、ロマン主義の対象認識についての理論の根本命題に関する最も精密な形式として提示される次の一節が、不可欠のものである。

「ある存在者 (Wesen) が他の存在者によって認識されることは、認識されるものの自己認識、認識するものの自己認識、および、認識するものがその認識対象である存在者によって認識されることと、同時に起こる。」(GS I, 58/WN 3, 63)

こうした認識のあり方に基礎づけられ、まなざしはアウラを生み出す。そして、このように規定されたまなざしは、先に考察した「照応」と結びつく。まなざしは照応を生み出すひとつの働きである。

また、「厳密な意味での経験」がもつ「礼拝」という特性もアウラによって説明することが可能となる。

「本質的に遠いものとは、近づきえないものことである。事実、近づきえないことが、礼拝の対象の主要な性質のひとつである。」(GS I, 647)

ここから、「ある遠さが一回的に現われているもの」というアウラの特性が、「厳密な意味での経験」に対して、礼拝的性格を賦与していることが明らかとなる。

6 次のステップへ向けて

ここで、本研究に残された課題を提示する。それは、「記憶の帰属」あるいは「記憶の主体」を問うことと、「追想の時」について考察することである。

「記憶の帰属・記憶の主体」に関する問いについては、ベンヤミンの思索とともに、ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』第3章「個人的記憶と集合的記憶」が導きの糸を示してくれる。そのなかで本研究にとって特に重要なのは、次の仮説である。

「記憶を自己へ、身近な人々へ、他者へ三重に賦与するという仮説」(Ricoeur 2000, 163)

ここで述べられる「身近な人々」は、「近くにいる他者」であり、「特権をもつ他者」のことである (Ricoeur 2000, 162)。

リクールの哲学も視野に入れて、「幼年時代の記憶の主体となり得るのは誰なのか」*⁸、「遊歩者は、その主体になり得るのか」を解明することが必要である。

また、「追想の時」については、『歴史の概念について』が重要な手がかりを提供する。ここで問題とする「追想の時」とは、ベンヤミンの考える「記憶」によって過去が現在に現われる時のことである。例えば、『歴史の概念について』第XIVテーゼでは、次のように述べられている。

「歴史は構成の対象であって、この構成の場をなすのは均質で空虚な時間ではなく、現在時 (Jetztzeit) によって満たされた時間である。」(GS I, 701/WN 19, 40)*⁹

さらに、第Vテーゼでは、「記憶」の偶然性に関わる、次のような記述がある。

「過去の真の形象はさっと掠め過ぎてゆく。

過去は、それが認識可能となる刹那に一瞬ひらめき、もう二度と立ち現われはしない。」(GS I, 695/ WN 19, 32)

これらのテーゼを分析し、「追想の時」は、第VIテーゼで示される「危機の瞬間」(GS I, 695/ WN 19, 33) と同じ「時」なのかが解明されなければならない。

それでは次稿では、これまでの考察をもとに、「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」という問いに対して、最終的な解を与えることにしよう。

(以下、「幼年時代の記憶と集合的記憶(3)」に続く。) *10

凡例

(1) ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用箇所は、() 内にGSの略号の後に以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パサージュ論』(*Das Passagen-Werk*) 所収の草稿群については、[]内に整理番号を記すことで示す。

(2) 新たに刊行が開始された『作品と遺稿』からの引用箇所は、() 内にWNの略号の後に巻数と頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Werke und Nachlaß, Kritische Gesamtausgabe*, im Auftrag der Hamburger Stiftung zur Förderung von Wissenschaft und Kultur hrsg. von Christoph Godde und Henri Lonitz in Zusammenarbeit mit dem Walter Benjamin Archiv, Suhrkamp, 2008-.

(3) ベンヤミンのテキストからの引用に際しては、既存の邦訳書を適宜参照したが、訳文は必要に応じて神谷自身が訳し直している。

註

* 1 ベンヤミンは、『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』においては、「想起」(Erinnerung) をブルーストの「意志的記憶」(mémoire volontaire) とほぼ同義のものとして使い、「記憶」(Gedächtnis) をブルーストの「無意志的記憶」(mémoire involontaire) と同一と見なし、両者の区別の重要性に注意を喚起している(GS I, 612, Fußn.)。そして、ベンヤミンはベルクソンの『物質と記憶』における「純粹記憶」とブルーストの「無意志的記憶」を同一視している(GS I, 609)。

* 2 ここで「想起」と訳した語のフランス語原語はsouvenirであり、ベンヤミンはドイツ語ではErinnerungと訳している。

* 3 経験と記憶との関係を考究する際には、浅井が『経験体の時間』のなかで示している、次の考えも参考になる。「他者の時間に浸透された個の時間の記憶を、経験は、歴史の時間として孕んでいる。」(浅井 1994, 14)

* 4 ブルースト『失われた時を求めて』の訳出にあたって、ここでは、吉川一義訳(『失われた時を求めて1 スワン家のほうへI』岩波書店〈岩波文庫〉、2010年)および、鈴木道彦訳(『失われた時を求めて1 第1篇スワン家の方へI』集英社、1996年)を参照している。

* 5 ベンヤミンの邦訳では、ボードレールに関わる文脈では「万物照応」という訳をあてることが多い。これはボードレールの詩のタイトルとして「万物照応」が使われていることによる。しかし、本稿ではベンヤミンのKorrespondenzもボードレール

のcorrespondancesも本質的には同じものであることを明確に示すために、ボードレールに関わる文脈でも「照応」を使うことにする。

- * 6 照応に関してこのように理解を深めてくると、『パサーージュ論』においても引用されているプルーストの『失われた時を求めて』『スワン家のほうへ』のなかにある、次の一節も大切なものとして浮かび上がってくる。

「すると、このような文学的関心から離れ、それとはなんら関係なく、突然ひとつの屋根、石ころに反射する陽の光、土の道の匂いなどが私の足をとめるのだ。それは、それらが私に贈ってくれた特別の快樂のためでもあるが、またそれらが私に見えるものの向こうに何かを隠して、それを取りに来てみよと誘っていながら、私が努力してもそれを発見できない気がしたからである。」[M2a, 1] (Proust 1919, 256/ Proust 1987, 176)

ベンヤミンは、これを「プルーストにおける遊歩の原理」と呼んでいる。ここで語られる「私に見えるものの向こうに隠されている何か」とは一体何か。『遊歩者の回帰』によれば、遊歩者が探し求めているものは、「形象」である (GS III, 196)。それゆえ、この「私に見えるものの向こうに隠されている何か」もまた何らかの「形象」である。そして、「私に見えるものの向こうに隠されている何か」という形象が到来するという、この遊歩者の経験にもまた、照応が働いているのである。

- * 7 ベンヤミンのアウラ論とはやや異なり、ヴァレリーは『アナレクタ』に収められた断章ではアウラの知覚を夢における知覚と見なしている。

「そこにそれが見えると私が言う時、私とその事物の間に方程式 (équation) が立てられているわけではない。」それに対して、「夢のなかには方程式が存在する。私が目にしていない事物は、私がそれを見ているのと同程度に、私を見ている。」

(Valéry 1935, 193-194)

- * 8 この「幼年時代の記憶」の「記憶」という語を一般的な意味で理解すべきではない。これは本稿で考察してきたベンヤミン独自の「記憶」概念のことである。

- * 9 このテーゼを直接の分析対象として語られているものではないが、浅井がヘルマン・ブロッホの生誕100年を記念する文章のなかで「経験体の時間」を巡って繰り広げている次の洞察は、このテーゼを理解する上で重要である。

「現在とは、個の時間が、他者の時間を媒介し他者の時間に媒介されつつ、歴史の時間に転化する意識空間にほかならない。」(浅井 1994, 13)

- * 10 当初この研究は2部構成を想定して着手された (cf. 神谷 2011, 65)。しかし、本研究の「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」という問いに十全に応えるためには、「厳密な意味での経験」を巡って詳細な考察を行う必要があることが明らかとなったために、3部構成に変更している。

参考文献

- Adorno, Theodor W. (1970) : *Über Walter Benjamin*, Surhkamp.
- Baudelaire, Charles (1931/1932) : *Œuvres*, 2 vols., Bibliothèque de la Pléiade, v. 1, 7, Jacques Schiffrin.
- Bergson, Henri (1959) : *Œuvres*, Édition du centenaire, P. U. F.
- (1985) : *Matière et mémoire*, 94^e édition, P. U. F.
- (1986) : *L'évolution créatrice*, 156^e édition, P. U. F.
- Deleuze, Gilles (1964) : *Proust et les signes*, P. U. F.
- Jankélévitch, Vladimir (1959) : *Henri Bergson*, 2^e éd., P. U. F.

- Lemke, Anja (2007) : *Gedächtnisräume des Selbst: Walter Benjamins "Berliner Kindheit um neunzehnhundert"*, 2 Aufl., Königshausen & Neumann.
- Menninghaus, Winfried (1986) : *Schwellenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp.
- Muthesius, Marianne (1996) : *Mythos Sprache Erinnerung: Untersuchungen zu Walter Benjamins "Berliner Kindheit um neunzehnhundert"*, Stroemfeld.
- Opitz, Michael und Wizisla, Erdmut (hrsg.) (2000) : *Benjamins Begriffe*, Suhrkamp.
- Proust, Marcel (1919) : *Du côté de chez Swann, À la recherche du temps perdu*, Édition de la nouvelle revue française, Gallimard.
- (1921) : A propos de Baudelaire, in: *Nouvelle revue française*, tome 16, 1^{er} juin 1921, 641-663.
- (1987-1989) : *À la recherche du temps perdu*, Nouv. éd. 4 vols., Bibliothèque de la Pléiade, v. 100-102, 356, Gallimard.
- Ricœur, Paul (1984) : *Temps et récit, tome II, La configuration dans le récit de fiction*, Seuil.
- (2000) : *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Seuil.
- Valéry, Paul (1930) : *Cabier B 1910*, Gallimard.
- (1935) : *Analecta*, Gallimard.
- Witte, Bernd (hrsg.) (2008) : *Topographien der Erinnerung: zu Walter Benjamins Passagen*, Königshausen & Neumann.
- 浅井健二郎 (1994) : 『経験体の時間—カフカ・ベンヤミン・ベルリン—』 高科書店
- (1996) : 「解説」、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション2 エッセイの思想』 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)
- (1997) : 「解説」、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション3 記憶への旅』 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)
- 今村仁司 (2000) : 『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』 岩波書店 (岩波現代文庫)
- 柿木伸之 (2001) : 「経験の〈非一場所〉へーベンヤミンの〈認識〉の理論—」、『哲学科紀要』26、上智大学文学部、47-86
- (2005) : 「経験の廃墟から新たな歴史の経験へー経験の可能性を探究するベンヤミンの思考をめぐる」、『比較思想研究』32、比較思想学会、37-48
- 鹿島 茂 (1996) : 『『パサージュ論』熟読玩味』 青土社
- 神谷英二 (2009) : 「遊歩者・記憶・集団の夢—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために—」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』17 (2)、福岡県立大学人間社会学部、67-79
- (2010) : 「固有名と記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』18 (2)、福岡県立大学人間社会学部、13-25
- (2011) : 「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』19 (2)、福岡県立大学人間社会学部、65-76
- 杉山直樹 (2006) : 『ベルクソン 聴診する経験論』 創文社
- 多木浩二 (2003a) : 「場所と境界—ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』・空間の思考12」、『ユリイカ』35 (10)、青土社、30-39
- (2003b) : 「街の名前あるいは都市の言語化—ベンヤミンにおける固有名詞・空間の思考13」、『ユリイカ』35 (11)、青土社、19-27
- (2004) : 『雑学者の夢』 岩波書店
- 近森高明 (2007) : 『ベンヤミンの迷宮都市—都市のモダニティと陶醉経験』 世界思想社
- 戸島貴代志 (2007) : 『創造と想起—可能的ベルクソニズム—』 理想社
- 楢垣立哉 (2000) : 『ベルクソンの哲学—生成する實在

の肯定一』勁草書房

道簇泰三（1997）：『ベンヤミン解説』白水社